父親・母親の養育スタイルに関する大学生の 回想とアイデンティティ形成

平田 裕美 女子栄養大学

University students' retrospective assessments of the impact of parenting on their identity formation

Hiromi Hirata (Kagawa Nutrition University)

The impact of parenting on the family orientation of university students and their identity formation during adolescence was investigated to identify parenting styles that promoted identity integration and minimized confusion. In addition, cooperation between fathers and mothers was analyzed to explain parenting styles. The results indicated that students of both genders who were raised by parents with an authoritative style more often evaluated that their parents cooperated in raising them compared with those who were raised with other parenting styles. Moreover, identity integration was significantly higher among students who were raised with an authoritative parenting style than among those raised with an authoritarian and uninvolved parenting style, whereas the opposite outcome was seen for identity confusion. Therefore, it was concluded that in the process of identity formation during adolescence, parenting styles that are responsive to children are essential, as is putting demands on them to mature based on proper criteria, i.e. disciplining them. However, further discussion is required about the fact that no differences were seen for the permissive parenting style.

Key words: identity, integration, confusion, parenting style, parenting cooperation.

The Japanese Journal of Psychology

2018, Vol. 89, No. 3, pp. 221–228

J-STAGE Advanced published date: July 14, 2018, doi.org/10.4992/jjpsy.89.16071

青年期の発達課題であるアイデンティティは、自己の意思決定と成人期以降の軌道を導く「内なるコンパス “inner compass”」と称される (Côté, 2000; Côté & Levine, 2002)。アイデンティティの統合 (「私は、自分が何になりたいのかをはっきりと考えている」) は自尊感情を高め (Kutkiene, 2008)、情緒を安定させ (Dumas, Lawford, Tieu, & Pratt, 2009; Sandhu, Singh, Tung, & Kundra, 2012)、アイデンティティの混乱 (「私は、自分のしていることを本当はわかっていない」) は人格障害や抑うつなどに関連する (Jung, Pick, Schlüter-Müller, Schmeck, & Goth, 2013)。整理すると、青年期のアイデンティティは、統合寄りの状態になると、不安や心身の症状と負の相関、混乱寄りの状態に

なると、正の相関になると予測される。これらの青年期のアイデンティティの統合と混乱への影響要因には様々な見解があり、その影響要因の1つとして注目されているのが家族である。家族は青年期の最も重要な影響要因である (Steinberg, 2001) との指摘からも、青年期のアイデンティティ形成への家族、とくに親の養育効果は大きいと考えられる。

青年期のアイデンティティと家族

Schwartz, Pantin, Prado, Sullivan, & Szapocznik (2005) によると、親の肯定的な養育、コミュニケーション、サポートは青年期の子どものアイデンティティの統合と正の相関を、アイデンティティの混乱とは負の相関を示す。Rageliene & Justickis (2016) は、Bowen (1978) の自己分化と青年期の子どもをもつ親の養育スタイルとの関連から、子どもの意見を考慮せず、服従やルールへの順守を要求する親の養育スタイルはアイデンティティ混乱を、男子では完全に仲介し、女子では部

Correspondence concerning this article should be sent to: Hiromi Hirata, Developmental Psychology Laboratory, Faculty of Nutrition, Kagawa Nutrition University, Chiyoda, Sakado 350-0288, Japan. (E-mail: hhiromi@eiyo.ac.jp)

分的に仲介していたと述べている。青年期の子どもへの親の受容的養育態度 (Sandhu et al., 2012), 温かい家族関係や適度な強さをもつ家族の凝集性 (Van Hoof, Raaijmakers, Van Beek, Hale, & Aleva, 2008), そして子どもから親に向けられた愛着 (Nawaz, 2011) などは, 青年期のアイデンティティ形成に肯定的な影響をもつ要因とされる。Yablonska (2013) も青年期にアイデンティティが統合される好ましい条件として, 適度な強さをもつ家族の凝集性と民主的な親の養育スタイルをあげている。このように生まれ育った家族(定位家族, family of orientation)における親の養育は, 青年期のアイデンティティの統合と混乱を調整するものとして理解される。

青年期のアイデンティティと養育スタイル

Baumrind (1971) は, 親の養育, 親と子どもとのコミュニケーションにおける応答性と成熟への要求, 子どもの行動を管理する(しつける)要求性の高低に基づいて, 養育スタイルを権威的養育スタイル (Authoritative parenting style), 権威主義 (独裁) 的養育スタイル (Authoritarian parenting style), 許容的養育スタイル (Permissive parenting style) の3つに分類している。また, Maccoby & Martin (1983) は, 権威的養育スタイル, 権威主義 (独裁) 的養育スタイル, 許容的養育スタイル, そして放任的養育スタイル (Uninvolved parenting style) の4養育スタイルを提示している。Buri (1991) の尺度構成によると, 権威的に養育する親は民主的な判断を伴う親であり, 子どもとのコミュニケーションを重視する行動をとると同時に, 子どもへの成熟の要求やしつけに関する適切な基準をもつ。権威主義に基づく親は, 独裁的に判断する傾向があり, 子どもへの成熟の要求も高く, しつけることに厳格な姿勢をもつ。許容的な親は, 子どもとのコミュニケーションを重視するが, 子どもへの成熟の要求や子どもをしつけることには消極的である。そして, 子どもを拒否/放任する親は, 受容的な養育態度や子どもとのコミュニケーションをとろうとせず, 子どもへの成熟の要求もしつけることもしない。さらに, アイデンティティの統合に近似する概念として, 自ら自己成長を成し遂げようとする認知・行動を示す自己成長主導性 (Robitschek, 1998; Robitschek et al., 2012) や, 自尊感情への影響では, 権威的養育スタイルの家庭で育った青年がより肯定的である (Hirata & Kamakura, 2017)。青年期の情報処理スタイルに着目した研究では, 問題に向き合い, 自ら解決しようと積極的に情報収集し, 有益な情報を選択できる(情報スタイル)青年と権威的養育スタイルの親, 他者の期待や規範に従い, 未経験でも対処するため意思決定時の混乱が低い(規範スタイル)青年と権威主義 (独裁) 的養育スタイルの親, 直面した問題の解決を延期または回避し, 一時的対処しかできない(拡散

／回避スタイル)青年と許容的養育スタイルの親との関係が予測され, 特に規範スタイルと権威主義 (独裁) 的養育スタイルとの関連が指摘されている (Berzonsky, 1990, 2004)。Baumrind (1991) も, Berzonsky (1990) の情報処理スタイルに注目し, 情報スタイルの青年は権威的養育スタイルの家庭で育ったと述べていたことを報告している。権威的養育スタイルの親に育てられていた場合は, 青年期のアイデンティティは統合寄りになると考えられる。

本研究の目的

青年期の成功したアイデンティティ発達とは, アイデンティティの統合が混乱よりも優位になる程度に操作されることにある (Erikson, 1968)。Baumrind (1971) や Maccoby & Martin (1983) が説明する, 応答性と要求性から構成される親の養育スタイルは, 青年期のアイデンティティ形成の統合, あるいは混乱にどのように関わっているのか。それを明らかにするために, 本稿では養育スタイル別に, 青年期のアイデンティティ形成 (統合・混乱) における差異を検討する。そして, どのような条件時に養育行動はより表出されるのかを検討するため, 配偶者との養育連携が父親, 母親の養育行動を高めるという知見 (平田, 2003a, 2003b, 2012) に基づき, 父親, 母親の養育スタイル別に養育連携における差異を検討する。Schwartz, Mason, Pantin, & Szapocznik (2009) によると, 青年期のアイデンティティの混乱は, 青年の自己申告による家族機能と強く関連している。また, 養育者自身の養育行動そのものへの評価よりも, 養育者の行動を子どもがどのように解釈したり評価したりしているのかが重要である (Grusec, 2011)。さらに, 児童期までの同一化を基礎としながらも, 青年期にアイデンティティは統合される (谷, 2008)。したがって, 家族と同居し, かつ自己に対する客観性が芽生えだした青年期中期の高校生ごろを定位家族として振り返る時期に限定し, 青年期後期にあたる大学生男女を対象に分析を進める。

方 法

参加者と手続き

関東圏の大学生 367 名に調査参加を依頼し, 回答に未記入があった 39 名のデータを除外した。そのため本研究では 328 名 (男子 162 名, 女子 166 名, 平均年齢 19.6 歳, $SD = 1.38$) を分析対象とした (調査期間は 2016 年 5—6 月)。講義において同意書に署名をした大学生を対象に質問紙調査を一斉実施した (調査に要した時間は 20 分程度)。なお, 調査実施にあたり, 女子栄養大学倫理審査委員会の承認 (第 54 号) を事前に得ている。

Table1
養育行動尺度の因子分析

	父親			母親		
	F1	F2	共通性	F1	F2	共通性
1. 意見が異なったときは、私の意見に耳を傾け、話してくれていた。	.81	-.10	.58	.82	-.09	.62
2. 私が困ったときや悩んだときは、相談にのってくれていた。	.73	.08	.60	.83	-.03	.67
3. 私が迷っている時は、考えがまとまるまで待ってくれていた。	.67	-.09	.40	.67	-.06	.41
4. 一人の人間として、私と対等に接してくれていた。	.66	-.12	.37	.62	.00	.39
5. 夢や生き方など、自分の考えを私に話してくれていた。	.62	.14	.49	.62	.04	.41
6. 私と日常の社会現象や娯楽などの話題で話していた。	.54	.11	.36	.43	.20	.31
7. 一緒に（買い物、食事、見学・観戦、散歩など）出かけてくれた。	.53	.10	.33	.41	.23	.31
8. 私が失敗などをしたときは、なぐさめたり、励ましたりしてくれていた。	.50	.00	.24	.77	-.02	.57
9. 家族でのルール（家事の役割分担、帰宅時間など）を、私に守らせていた。	-.24	.85	.58	-.10	.83	.62
10. 社会の規範（道徳観、お金のルールなど）を、私に守らせていた。	.01	.73	.53	-.07	.82	.62
11. 礼儀作法（目上の人への挨拶、言葉づかい）を教えていた。	.17	.69	.61	.27	.58	.56
12. あいさつなどを含めた基本的生活習慣を守らせていた。	-.03	.69	.46	.11	.63	.48
13. 私の間違っ言動や行動には、厳しく注意していた。	.06	.61	.41	-.13	.83	.60
14. しつけについては、毅然とした態度で、私に接していた。	.13	.52	.36	.14	.55	.40
因子間相関	F1	-		-		
	F2	0.47	-	0.48	-	
寄与率（%）	33.56	11.64		37.38	12.36	

注) F1 応答性, F2 要求性。

質問紙の構成

養育行動尺度 養育行動尺度については、養育行動を測る尺度として学齢期から青年期まで、前原（2012）などで広く使われている、平田（2001）によるBaumrind（1971）の応答性と要求性の2つの次元に基づいた「父親の青年への関わり行動尺度」の親と子どもを対象とした改訂版を、過去形の文に変更して用いた（平田，2003a, 2003b, 2012）。しかし、「夢や生き方など、自分の考えを私に話してくれていた」の項目は要求性に関する項目として作成されていたが、親を対象とした場合は要求性に、子どもを対象とした場合は応答性に含まれる可能性が高い。本稿では大学生を対象に定位家族である親の養育を尋ねるので、この項目は応答性に属するものと捉えた。そのため、親の民主的な養育、親と子どものコミュニケーションにあたる「意見が異なったときは、私の意見に耳を傾け、話してくれていた」などの養育行動に負荷量が高い「応答性：会話／表現行動」は7項目から8項目に、親の管理、成熟への要求である「家庭でのルール（家事の役割分担、帰宅時間など）を、私に守らせていた」などの養育行動に負荷量が高い「要求性：管理／成熟へ

の要求行動」は7項目から6項目に振り替えた。これより、項目数が異なるため標準化する必要がある。それぞれのZスコアを算出して分析に用いる。

養育連携尺度 父親、母親の養育行動の規定因として、配偶者との養育における連携が仮定されている。本稿においても、平田（2001, 2003a, 2003b, 2012）の「家族の問題（子ども／私への教育やしつけを含めて）については夫婦で／父／母と話し合っている」など、配偶者との養育に関する意見交換、配偶者を頼りにする、協力する行動を測る「養育連携尺度」6項目を過去形の文に変更して用いた。

Erikson Psychosocial stage inventory の第5段階邦訳版 アイデンティティ形成（統合・混乱）を測る尺度として、Erikson Psychosocial stage inventory の第5段階邦訳版「エリクソン心理社会的段階目録：第5段階（畑野・杉村・中間・溝上・都築，2014）」を用いた。この尺度は「私は、自分が何になりたいかをはっきりと考えている」などの統合6項目、「私は、人生をどのように生きたいのかを自分で決められない」などの混乱6項目から構成されている。

これらの項目は、すべて「全くそう思わない」から「かなりそう思う」の5件法で回答を求めた。

Table 2
養育連携尺度の因子分析

	父親	共通性	母親	共通性
1 私の相談相手として、父／母はふさわしいと考えていた。	.76	.58	.78	.61
2 私を育てる方針について、父／母と考えが一致していた。	.74	.55	.68	.47
3 私を育てることについて、父／母の考えを尊重していた。	.73	.53	.86	.74
4 私に関することを、父／母に聞いたり、話したりしていた。	.67	.45	.72	.51
5 私を育てることについて、父／母を頼りにしていた。	.65	.43	.82	.67
6 家族の問題（私への教育やしつけを含めて）については、父／母と話し合っていた。	.50	.25	.66	.43
寄与率（％）	46.47		57.28	

Table 3
クラスター別養育スタイル

Cluster	全体	男子 / 女子	応答性	要求性
父親				
1 権威	93	40/53	4.29	4.44
2 権威主義（独裁）	80	44/36	2.74	3.90
3 許容	109	63/46	3.73	3.20
4 放任	46	15/31	2.49	2.10
母親				
1 権威	119	40/79	4.55	4.68
2 権威主義（独裁）	99	63/36	3.49	4.05
3 許容	72	37/35	4.17	3.19
4 放任	38	22/16	2.57	2.74

養育行動尺度、養育連携尺度 養育行動、養育連携を測るために、養育行動尺度、養育連携尺度を用いた。この尺度は、「高校生の頃、あなたのお父さんは」、「高校生の頃、あなたのお母さんは」というように、父親と母親に関する質問を別々の枠組みで尋ねた。

学年、性別、年齢、家族構成、現在の住居形態など調査参加者の属性に関する質問は、フェイスシートにまとめて、記入を依頼した。

結 果

最初に天井効果や床効果のチェックを行った（ $M \pm 1SD$ が最大値、最小値を超える項目）が、どの項目においても見られなかった。父親、母親の養育行動尺度、養育連携尺度に因子分析（主因子法、promax 回転）を施した。

父親の養育行動では第 1 因子の寄与率が 33.56%，第 2 因子の寄与率が 11.64%，母親の養育行動では第 1 因子の寄与率が 37.38%，第 2 因子の寄与率が 12.36%であったことから、2 因子構造が確認された。第 1 因子「応答性：会話／表現行動」、第 2 因子「要求性：管理／成熟への要求行動」の Cronbach の α 係数は、父親の応答性：会話／表現行動が .84、要求性：管理／成熟への要求行動が .84、母親の応答性：会話／表現行動が .86、要求性：管理／成熟への要求行動

が .87 と、これまでと同様に極めて高い内的整合性が認められた（Table 1）。また養育連携尺度についても、父親の第 1 因子の寄与率が 46.47%，母親の第 1 因子の寄与率が 57.28%であったことから、第 1 因子の寄与率の高さ、および固有値落差により、単因子構造が確認された。Cronbach の α 係数は、父親が .83、母親が .87 と、かなり高い内的整合性が理解された（Table 2）。エリクソン心理社会的段階目録：第 5 段階の邦訳版についても Cronbach の α 係数を算出したところ、統合が .74、混乱が .76 と、満足のいく内的整合性が確認された。

父親・母親の養育スタイル

大学生が評価する応答性：会話／表現行動（以下、応答性とする）Z スコア、大学生が評価する要求性：管理／成熟への要求行動（以下、要求性とする）Z スコアを変数にして、養育のタイプを分類するため、非階層的クラスター分析を施した。類似した性質からクラスターにまとめる際の切り捨てを最小限にとどめるために Ward 法を採用した。Baumrind (1971) は 3 スタイルなので、3 類型を最初に想定し、クラスターに分けたところ、修正 R^2 値は .43 であった。結果を見ると、応答性、要求性の両得点が平均より高い群、中間の群、低い群が存在した。これにより、応答性も要求性も平

Table 4
性別間、父親養育スタイル間による養育連携、アイデンティティの差異に関する分散分析の結果

		男子		女子		性の主効果	養育の主効果	交互作用
		M	SD	M	SD			
アイデンティティ統合								
性別		3.25	0.06	3.29	0.06	ns		ns
養育スタイル	1 権威	3.53	0.11	3.33	0.10		1 > 4 *	
	2 権威主義（独裁）	3.24	0.11	3.24	0.12			
	3 許容	3.20	0.09	3.49	0.10			
	4 放任	3.01	0.18	3.10	0.13			
アイデンティティ混乱								
性別		2.70	0.70	2.62	0.06	ns		ns
養育スタイル	1 権威	2.43	0.12	2.45	0.11		2, 4 > 1 **	
	2 権威主義（独裁）	2.81	0.12	2.68	0.13			
	3 許容	2.79	0.10	2.43	0.11			
	4 放任	2.74	0.20	2.94	0.14			
養育連携								
性別		3.34	0.07	3.63	0.06	***		ns
養育スタイル	1 権威	3.80	0.12	4.04	0.10		1 > 2, 3, 4 ***	
	2 権威主義（独裁）	3.16	0.11	3.42	0.12		3 > 4 ***	
	3 許容	3.37	0.09	3.71	0.11			
	4 放任	3.02	0.19	3.33	0.13			

注) ns は有意ではないことを示す。

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

均よりかなり低い放任群があると考えた。クラスタ数を4, 5と変化させると、4クラスタの場合、応答性と要求性がともに低い群が出現した。そこで、本稿では4クラスタを採用することとした（修正 $R^2 = .57$ ）。各クラスタの性質より、先行研究の見解に基づいた養育スタイルの名称とし、人数と応答性、要求性の平均値を父親、母親別に Table 3 に示す。

父親の養育スタイル別に見た差異

性別間、養育スタイル間による大学生のアイデンティティと大学生が評価する父親の養育連携（以下、父親の養育連携とする）の差異を検討するために、養育スタイルと性別を説明変数とし、従属変数をアイデンティティ統合、混乱、そして父親の養育連携とした二元配置分散分析を行った（Table 4）。最初に、交互作用から検討したが、すべてに有意な差は認められなかった。まず、大学生のアイデンティティの統合と混乱について、前者の統合では、性の単純主効果は認められなかったが、養育スタイルの単純主効果（ $F(3, 320) = 3.01$, $p < .05$ ）が有意であった。同様に、父親の養育スタイル間の統合の平均値の差を検討するために多重比較を行った。権威的養育スタイルは放任的養育スタイルよりも統合の平均値が有意に高いと示さ

れた。後者の混乱でも、性の単純主効果は認められなかったが、養育スタイルの単純主効果（ $F(3, 320) = 3.38$, $p < .01$ ）が有意であった。父親の養育スタイル間の混乱の平均値の差を検討するための多重比較の結果、権威的養育スタイルが権威主義（独裁）的養育スタイル、放任的養育スタイルよりも混乱の平均値が有意に低いことが示された。父親の養育連携では、性の単純主効果（ $F(1, 320) = 10.53$, $p < .001$ ）と養育スタイルの単純主効果（ $F(3, 320) = 14.29$, $p < .001$ ）が共に有意であった。父親の養育連携の性別間の平均値より、男子よりも女子の方が有意に高いことが確認された。また、養育スタイルの単純主効果が有意であったことから、養育スタイル間の養育連携の平均値の差を検討するために多重比較を行った。結果、権威的養育スタイルは他の養育スタイルよりも父親の養育連携の平均値が有意に高いこと、許容的養育スタイルは放任的養育スタイルよりも父親の養育連携の平均値が有意に高いことが示された。

母親の養育スタイル別に見た差異

性別間、養育スタイル間による大学生のアイデンティティと大学生が評価する母親の養育連携（以下、母親の養育連携とする）の差異を検討するために、養

Table 5
性別間、母親養育スタイル間による養育連携、アイデンティティの差異に関する分散分析の結果

		男子		女子		性の主効果	養育の主効果	交互作用
		M	SD	M	SD			
アイデンティティ統合								
性別		3.24	0.06	3.21	0.06	ns		ns
養育スタイル	1 権威	3.57	0.11	3.43	0.08		1 > 2, 4 *	
	2 権威主義（独裁）	3.23	0.09	3.17	0.12			
	3 許容	3.16	0.12	3.36	0.12			
	4 放任	3.02	0.15	2.88	0.17			
アイデンティティ混乱								
性別		2.69	0.07	2.67	0.07	ns		ns
養育スタイル	1 権威	2.43	0.12	2.49	0.09		2, 4 > 1 **	
	2 権威主義（独裁）	2.87	0.10	2.71	0.13			
	3 許容	2.69	0.13	2.51	0.13			
	4 放任	2.77	0.17	2.98	0.19			
養育連携								
性別		3.25	0.07	2.98	0.07	***		ns
養育スタイル	1 権威	4.02	0.13	3.58	0.09		1 > 2, 3, 4 ***	
	2 権威主義（独裁）	3.15	0.10	3.11	0.13		2 > 4 ***	
	3 許容	3.15	0.13	2.94	0.14			
	4 放任	2.67	0.17	2.27	0.20			

注) ns は有意ではないことを示す。

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

育スタイルと性別を説明変数とし、従属変数をアイデンティティ統合、混乱、そして母親の養育連携とした二元配置分散分析を行った (Table 5)。交互作用については、母親においても有意な差は認められなかった。まず、大学生のアイデンティティの統合と混乱について、前者の統合では、性の単純主効果は認められなかったが、養育スタイルの単純主効果 ($F(3, 321) = 6.78$, $p < .05$) が有意であった。同様に、母親の養育スタイル間の統合の平均値の差を検討するために多重比較を行った。権威的養育スタイルは権威主義 (独裁) 的養育スタイルと放任的養育スタイルよりも統合の平均値が有意に高いと示された。後者の混乱でも、性の単純主効果は認められなかったが、養育スタイルの単純主効果 ($F(3, 321) = 4.32$, $p < .01$) が有意であった。母親の養育スタイル間の混乱の平均値の差を検討するための多重比較の結果、権威的養育スタイルが権威主義 (独裁) 的養育スタイル、放任的養育スタイルよりも混乱の平均値が有意に低いことが示された。母親の養育連携では、性の単純主効果 ($F(1, 321) = 7.33$, $p < .001$) と養育スタイルの単純主効果 ($F(3, 321) = 30.61$, $p < .001$) が共に有意であった。母親の養育連携の性別間の平均値より、女子よりも男子の方が有意に高いことが確認された。また、養育スタイルの単純

主効果が有意であったことから、養育スタイル間の養育連携の平均値の差を検討するために多重比較を行った。結果、権威的養育スタイルは他の養育スタイルよりも、母親の養育連携の平均値が有意に高いこと、権威主義 (独裁) 的養育スタイルは放任的養育スタイルよりも母親の養育連携の平均値が有意に高いことが示された。

考 察

本研究では、青年期後期にあたる大学生男女を対象に、定位家族における父親、母親の権威的養育スタイル、権威主義 (独断) 的養育スタイル、許容的養育スタイル、そして放任的養育スタイルが、青年期のアイデンティティの統合、あるいは混乱にどのように関わっているのかを検討した。結果、権威的養育スタイルの父親、母親に育てられたと回想する大学生は、放任的養育スタイルの父親に育てられたと回想する大学生、権威主義 (独裁) 的養育スタイル、放任的養育スタイルの母親に育てられたと回想する大学生よりも統合が有意に高く、権威主義 (独裁) 的養育スタイル、放任的養育スタイルの父親、母親に育てられたと回想する大学生よりも混乱が有意に低いことが明らかにされた。コミュニケーションを主とした受容的な養育に

関する先行研究の見解 (Sandhu et al., 2012; Schwartz et al., 2005) にてらせば、許容的養育スタイルの父親、母親も青年期のアイデンティティを統合寄りに促すはずである。しかしながら、統合にとって有益であると認められた養育スタイルは権威的養育スタイルのみであった。この結果より、青年期のアイデンティティが統合寄りになり、混乱を防ぐには、応答性に当たる養育行動だけではなく、応答性とのバランスが取れた要求性、すなわち明確な基準のもとに適切に子どもをしつける養育行動が父親、母親両者に必要であるということが認められた。現在の正の強化に偏った養育への課題が得られたと考える。

今回の許容的養育スタイルの親は、子どもと関わる意識や行動は高いが、社会の規範やルールを教えるなどの行動や意識は低い。楽しい時間のみを共有しようとする、友だちのような親である情緒中心型の親と、子どもに関わろうとする意識は高いのだが、実際の行動が伴わない有言不実行型の親 (平田, 2003a) から構成された可能性がある。両者ともに要求性は低いという共通の特徴をもつが、情緒中心型の親は相手の立場で考えることはできても潜在化した不満や怒りから、あえて子どもに嫌われるようなこと (しつけ) はしない。一方、有言不実行型の親は、自分自身の親との関わりが少なかった経験から養育モデルが希薄であるため、親として、どのように子どもに関われば良いのか困惑しつつ、模索しながら関わろうとする。そのため、両者は要求性に対する考えが異なるのではない。なお、権威的養育スタイルの父親、母親に育てられたと回想する大学生は、他の養育スタイルの親に育てられたと回想する大学生よりも、父と母の養育連携は高いと評価していた。平田 (2003a, 2003b, 2012) の知見を支持する結果であった。大学生からの評価ではあるが、配偶者と連携して子どもを育てているという考えは、父親、母親の親としての民主的な養育、子どもとのコミュニケーションを重視する行動や子どもへの成熟の要求、しつけに関する適切な基準をもつ行動につながると理解できる。さらに、許容的養育スタイルの父親、権威主義 (独裁) 的養育スタイルの母親であったと回想している大学生は、放任的養育スタイルの父親、母親であったと回想している大学生よりも「協力して私を育ててくれていた」と評価していた。この差異より、配偶者である妻との養育連携は、父親の民主的な判断や表現の温かさ、コミュニケーションを、配偶者である夫との養育連携は、母親の子どもへの適切な基準に基づいた成熟の要求やしつける行動を促進させる可能性が考えられる。

本研究の限界と課題

ここで、本研究の限界と課題についても述べておく。1つめは、応答性による青年期のアイデンティティ

形成における統合に向けた影響力より、応答性と要求性は相互に関連性を有し影響力をもつことが十分に考えられることである。父親、母親の応答性に配慮した量的・質的検討を行う必要がある。

2つめは、母親の場合に限り、権威主義 (独裁) 的養育スタイルよりも権威的養育スタイルの方が有意に青年期のアイデンティティを統合寄りにしていたことである。父親には見られなかった結果であるため、これについては権威的養育スタイルと権威主義 (独裁) 的養育スタイルの相違を性差の視点から、より具体化する研究デザインが待たれる。

3つめは、養育連携について、父親、母親を対象とした個人、または集団面接などの質的調査による検討が必要なことである。父親、母親の子育てにおける共通認識や互いの養育に対する考えは、その養育行動だけではなく、個々の家族成員や家族の在り方そのものに影響を及ぼすことが先行研究からも予測される。実際の父親、母親それぞれの認識におけるずれや一致度などから、養育スタイルを見極めることが重要である。

4つめは、青年期では男女共に、男子では母親 (男子から見て異性の親) の父親 (男子から見て同性の親) への態度、女子では父親 (女子から見て異性の親) の母親 (女子から見て同性の親) への態度が父親、母親それぞれへの「互いを子どもの養育において頼りになる存在だと考えていた」という評価につながっていたことである。青年期の子どもの性差と親の性差の両者に着目した、父親、母親の養育機能に焦点をあてた検討が望まれる。養育の質により、父親、母親のどちらが担う方が、より良く子どもに受け入れられるのか、より適任であるのかという点が明らかになると思われる。

最後は、青年期の子どものアイデンティティが統合寄りに形成され、混乱を防ぐには、権威的養育スタイルの父親、母親の関わりが重要であるという結果に関連した課題である。前述の Erikson (1968) の「アイデンティティの統合が混乱よりも優位になる程度に操作される」鍵は定位家族における父親、母親の養育スタイルにあると言っても過言ではないだろう。また、子ども側の評価ではあるが、アイデンティティの統合に有益な権威的養育スタイルの父親、母親は養育連携が高いということも確認された。今後は児童期から成人期までなど、可能な限り発達段階における時間軸を広げ、日本の文化を考慮した親の養育スタイルと青年期のアイデンティティに関わるトランスナショナルな比較調査を試みるべきである。

引用文献

Baumrind, D. (1971). Current patterns of parental authority. *Developmental Psychology Monographs*, 4(1, pt.2).

- 1-103.
- Baumrind, D. (1991). Parenting styles and adolescent development. In J. Brooks-Gunn, R. Lerner, & A. C. Petersen (Eds.), *The encyclopedia of adolescence* (pp. 746-758). New York: Garland.
- Berzonsky, M. D. (1990). Self-construction over the life-span: A process perspective on identity formation. In G. J. Neimeyer & R. A. Neimeyer (Eds.), *Advances in personal construct psychology* (vol. 1, pp. 155-186). Greenwich: JAI Press.
- Berzonsky, M. D. (2004). Identity style, parental authority, and identity commitment. *Journal of Youth and Adolescence*, 33, 213-220.
- Bowen, M. (1978). *Family therapy in clinical practice*. New York: Library of Congress Catalog.
- Buri, J. R. (1991). Parental authority questionnaire. *Journal of Personality Assessment*, 57, 110-119.
- Côté, J. E. (2000). *Arrested adulthood: The changing nature of maturity and identity*. New York: New York University Press.
- Côté, J. E., & Levine, C. G. (2002). *Identity formation, agency, and culture: A social psychological synthesis*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Dumas, T. M., Lawford, H., Tieu, T. T., & Pratt, M. W. (2009). Positive parenting in adolescence and its relation to low point narration and identity status in emerging adulthood: A longitudinal analysis. *Developmental Psychology*, 45, 1531-1544.
- Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: Norton.
- Grusec, J. E. (2011). Socialization processes in the family: Social and emotional development. *Annual Review of Psychology*, 62, 243-269.
- 畑野 快・杉村 和美・中間 玲子・溝上 慎一・都築 学 (2014). エリクソン心理社会的段階目録 (第 5 段階) 12 項目版の作成 心理学研究, 85, 482-487.
- 平田 裕美 (2001). 父親の青年への関わり行動尺度の作成及び信頼性, 妥当性の検討——青年期前期の子どもをもつ父親を中心として—— お茶の水女子大学人間文化論叢, 3, 293-301.
- 平田 裕美 (2003a). 父親の養育行動と高校生の子どもの精神的健康——母親の養育行動との直接比較—— お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム「誕生から死までの人間発達科学」平成 15 年度公募研究成果論文, 2, 71-80.
- 平田 裕美 (2003b). 青年期前期の子どもに対する父親の関わり——分類と特性—— 家族心理学研究, 17, 35-34.
- 平田 裕美 (2012). 母親の就労が高校生の子どもへの養育行動に及ぼす影響——母親と子どもの「好感感情」と父親との協力関係—— 応用心理学研究, 38, 106-113.
- Hirata, H., & Kamakura, T. (2017). The effects of parenting styles on each personal growth initiative and self-esteem among Japanese university students. *International Journal of Adolescence and Youth*. Advance online publication. doi:10.1080/02673843.2017.1371614
- Jung, E., Pick, O., Schlüter-Müller, S., Schmeck, K., & Goth, K. (2013). Identity development in adolescents with mental problems. *Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health*, 7(26). doi:10.1186/1753-2000-7-26
- Kutkienė, L. (2008). 16-17 metų paauglių vaikinių ir merginų asmenybės tapatumo brandos ypatumai bei sąsajos su savęs vertinimu. *Pedagogika*, 90, 109-114. (In Lithuanian)
- Maccoby, E. E., & Martin, J. A. (1983). Socialization in the context of the family: Parent-child interaction. In P. H. Mussen (Ed.), *Handbook of child Psychology: Vol.4. Socialization, personality, and social development* (4th ed., pp. 1-101). New York: Wiley.
- 前原 敬子 (2012). 学童期後期の子供への父親の関わり類型と発達との関連 母性衛生, 53, 116-124.
- Nawaz, S. (2011). The relationship of parental and peer attachment bonds with the identity development during adolescence. *Journal of Social Sciences*, 5, 104-119.
- Rageliene, T., & Justickis, V. (2016). Interrelations of Adolescent's identity development, differentiation of self and parenting style. *Psichologija*, 53, 24-43.
- Robitschek, C. (1998). Personal growth initiative: The construct and its measure. *Measurement and Evaluation in Counseling and Development*, 30, 183-198.
- Robitschek, C., Ashton, M. W., Sperring, C. C., Geiger, N., Byers, D., Schotts, G. C., & Thoen, M. A. (2012). Development and psychometric evaluation of the Personal Growth Initiative Scale-II. *Journal of Counseling Psychology*, 59, 274-287.
- Sandhu, D., Singh, B., Tung, S., & Kundra, N. (2012). Adolescent identity formation, psychological well-being, and parental attitudes. *Pakistan Journal of Psychological Research*, 27, 89-105.
- Schwartz, S. J., Mason, C. A., Pantin, H., & Szapocznik, J. (2009). Longitudinal relationships between family functioning and identity development in Hispanic adolescents. *Journal of Early Adolescence*, 29, 77-211.
- Schwartz, S. J., Pantin, H., Prado, G., Sullivan, S., & Szapocznik, J. (2005). Family functioning, identity, and problem behavior in Hispanic immigrant early adolescents. *Journal of Early Adolescence*, 25, 392-420.
- Steinberg, L. (2001). We know some things: Parent-adolescent relationships in retrospect and prospect. *Journal of Research on Adolescence*, 11, 1-19.
- 谷 冬彦 (2008). 自我同一性的人格発達心理学 ナカニシヤ出版
- Van Hoof, A., Raaijmakers, Q., Van Beek, Y., Hale, W., & Aleva, L. (2008). A multi-mediation model on the relations of bullying, victimization, identity, and family with adolescent depressive symptoms. *Journal of Youth Adolescence*, 37, 772-782.
- Yablonska, T. (2013). Family factors of person's identity development during adolescence and early adulthood. *Social Welfare Interdisciplinary Approach*, 3, 31-42.